

## 第十六回高校生小論文コンクール

### 優秀作品 紹介

#### 個人部門

#### 沖永荘一博士記念大賞（最優秀賞）

沖縄県立向陽高等学校 二年



大城 沙織さん

#### ○個人部門

沖永荘一博士記念大賞（最優秀賞）

深く掘れ、私の胸中の泉

沖縄県立向陽高等学校 二年

大城 沙織さん

#### 優秀賞

私の未来

福岡県立八女農業高等学校 二年

石橋 晴美さん

#### 審査委員特別賞

守りたい自然

鹿児島県立鶴丸高等学校 一年

中能 理紗子さん

#### ○グループ部門

#### 審査委員特別賞

広島県立加計高等学校芸北分校

伊屋ヶ迫広樹さん三年

鷲野 由妃乃さん三年

仁井山 志穂さん二年

林 和樹さん二年

母校をなくさない

く地域に根ざした小規模校を

存続するために

深く掘れ、私の胸中の泉

私の趣味の一つに文学碑巡りがある。本や地図を頼りに文学碑を歩いて探し、写真を撮る。単純なことだが、奥が深い趣味だ。

私には、忘れられない文学碑が一つある。「深く掘れ 己の胸中の泉 餘所たよて 水や汲まぬごとに」自らの足元を深く掘り下げなさい。そこには汲んでも絶えることない泉が湧いている。という意味の歌が刻まれていた。この歌をよんだ伊波普猷（いはふゆう）は沖縄方言の研究や民俗学研究に大きな功績を遺した。彼の研究はいつも私に新たな発見を与えてくれる。私は沖縄学の父「伊波普猷」を尊敬し、憧れている。そんな彼の言葉だからこそ、私の胸に響いたのかもしれない。

しかし、彼の言葉について考えるとき、私は自問自答を繰り返す。「自らの足元を深く掘り下げるとはどのような意味だろうか」そして「そこで得ることのできる泉とは何だろうか」と。

私は文化が好きだ。長い歴史の中で紡がれてきた人類の営み。そこには多くの笑顔とドラマを垣間見ることができ。言葉にできないほどの思いが文化には詰まっている。だからこそ、私はそこに魅力を感じ、もっと知りたいと思うのだ。私はこの「文化が好き」を形にすべく、

これまで積極的に文化活動に参加してきた。沖縄方言の話者に話を聞き、ラジオドキュメントを制作。この作品は全国大会に出品された。また、沖縄に伝わる土帝君信仰について研究もした。フィールド調査や大学に通つての文献調査を繰り返し、レポートにまとめた。このレポートも地歴甲子園と呼ばれるコンテストで賞をいただくことができた。それだけではない。文化と歴史を軸とした観光プランを作成し、観光甲子園に出場したこともある。

「私は文化が好き」この胸に宿るときめきを私はずっと感じていたい。その炎をもっと大きくしたい。ただの興味からより深いものへ。私は自分自身がぼんやりと抱く「好き」を何とか形にしようと必死だった。

しかし、私が文化に触れれば触れるほど、募る思いがある。それは「私はまだ何も知らない」というものだ。文化というのは、地域ごとにわずかな差異がある。文化とは誰かの生きた証でもあるのだから、その差異を見過ごしてはならない。しかし、そう考えたら日本にはどれだけの地域があるのか。また「知りたい」と思い文献をあさるほど、私が知らなかった事実がたくさんでてくる。知識のない私には論文一つ読むのも一苦労だ。そして私は、その度に果てしない文化の世界に自分自身の無力感と焦燥感を感じるのだ。

伊波普猷が生きていた時代、沖縄は日本本土に統合されたばかりだった。それ故沖縄は野蛮な地域であると考えられていた面もあるようだ。そんな中、ただ一人沖縄文化の魅力に気づいたのが伊波普猷だった。「沖縄文化には魅力がある」その思いで研究を重ね、その魅力をもっと外に発信していこうと奮闘した。

そんな彼が文学碑の歌で言いたかったことは、まさにその「自分が生まれ育った地域の文化を知ることの大切さ」なのではないか。伊波普猷が逆境の中、沖縄文化を研究し続けたことを思うと、自然とその結論が私の胸に浮かんだ。

私は将来、文化学者になりたい。私にはまだまだわからないことがある。だからこそ、私はもっと知りたいのだ。沖縄に存在する多数の文化、日本に存在する無数の文化。私はそれらをずっと感じていたい。そして、その魅力を後世につないでいきたい。そう、かの偉人「伊波普猷」のように。

私はまだ高校生だ。大学進学という目標もある。果てしない世界に虚無感を抱くのはまだ早い。私にはやれることがまだたくさんあるはずだ。今よりさらに知識に食欲になろう。私の胸のときめきを大切にしよう。そこにはきつと、汲んでも絶えることのない泉がわいている。

## 個人部門

### 優秀賞

福岡県立八女農業高等学校 二年



石橋 晴美さん

## 私の未来

私の夢は「農業改良普及員」になることです。農業改良普及員とは、農家の方と直接接して農業技術の指導をしたり、経営相談に応じたり、農業に関する情報を提供し、農家の方々の農業技術や経営を向上するための支援を専門とする国家資格を持った都道府県の職員のことです。都道府県の制度の周知や遵守など技術面で農家の方々をサポートしています。私が農業改良普及員になりたいと思うようになったのは、環境問題について学んだのがきっかけでした。

私は今、農業高校に通っています。授業では、野菜や草花の栽培方法はもちろん、肥料の種類や病害虫の対処法などの勉強をしています。その授業の中で一番興味を持ったのが世界中で使われている農薬についてです。今、日本でも海外でも作物を育てる時に農薬を使用しています。農薬は農家の方々の作業を軽減し、時間の短縮をすることができます。しかし、農薬は使い方や使用量を間違えるととても危険なものとなるのです。

海外では発ガン性物質を含んだ農薬が流通しているとも言われており、このような危険な農薬を使用すると、野菜や果物と一緒に口にしてしまうだけでなく、土壌に染み込み、川や海に流れていくと魚や飲み水を汚染して生態系をも

壊してしまう危険があるのです。このことを知った私は大きな衝撃をうけました。農薬は危険な面を持っており、気軽に使ってよいものではないと気づいたのです。

そこで私は、農薬の正しい使用方法やできるだけ農薬を減らした栽培方法を広めていく農業改良普及員になりたいと思うようになったのです。しかし、農業技術は学校で学んだことだけでなく、実際に経験したことがとても重要です。しかし、私の家は農家ではないため、私は学校のインターンシップ制度を使い、一週間農家の方のお宅に通いながら、実際に様々な体験をさせていただきました。炎天下での作業は長袖を着ていても腕がヒリヒリするほど暑かったです。また、風がまつたく通らないため四十度を超えるハウスの中での中腰での作業は、学校での実習とはまったく違い、ものすごくきついものでした。しかし、このインターンシップを通して農業改良普及員となって、農家の方々をサポートしたいとあらためて思うようになりました。

また、農業改良普及員には農家の方々をサポートするという仕事だけでなく、将来の農業の担い手を育てるという大切な仕事もあります。現在の農業就業人口は、五十五年前と比べると約六分の一となり、平均年齢は六十五・八歳です。私たちの主食である米を栽培している米農家に限定すると七十歳近くになります。このような高齢化が進むと、農家を続けることができなくなる方が増えるだけでなく、耕作放棄地が増えていきます。耕作放棄地とは作付けされていない農地のことで、野生の鳥獣のすみかになったり、農地の持つ災害防止機能が失われ、土砂崩れの原因にもなったりします。食料自給率も下がり、外国からの輸

入に頼らなければ私たちの食べ物さえもなくなり、生活していくことができなくなってしまうのです。

農業は昔、きつい、汚い、臭いの3Kと言われ、若者たちが就業したいと思えるような環境ではありませんでした。しかし最近では、格好良くて、稼げて、感動する！という新3Kと言われるようになってきました。けれども、若者たちがこの新3Kを知らなければ、農業に対する良いイメージを持つようにはならないと思います。そこで、私はこの新3Kを若者に広めていき、農業の素晴らしさをもっと多くの人々に知ってもらいたいと思っています。

そのため私は、今以上にたくさんの方と勉強をし、大学の農学部に進学し、さまざまな経験を積み重ねながら、農家の後継者の育成に努め、農家の方々に信頼される農業改良普及員になりたいと思います。

個人部門

## 審査委員特別賞

鹿児島県立鶴丸高等学校 一年



中能 理紗子さん

守りたい自然

「漁師になりたい」、小さい頃私は、そう言っただけで驚かせたそう。花屋や客室乗務員など、一般的に女の子が憧れるような仕事には、まったく興味を示さず、生き物や道ばたの草花をじつと観察しているような子どもだったらしい。

それには、私の祖父が大きく影響していると思う。祖父は鹿児島県の離島で漁師をしていた。長い休みになると、家族で離島へ行くのが私は待ち遠しくて仕方なかった。いけすでクロマグロに餌をやったり、夜にイカ引きをしたりするのが大好きだったからだ。緑色の海で大きくはねて光るカンパチも、夜の黒い海で白く揺れるイカも、とても神秘的できれいだ。いつか私専用の長靴やゴムのズボンを買ってもらおうとひそかに思うほどだった。女の子である私が、嬉々として魚を追い回す様子を、祖父はうれしそうに見ていたが、さすがに跡を継ぎたいと言いつつ出たときには驚いたようだった。

「危険な仕事だよ」

祖父が真顔で言った一言に、私は叱られたような気持ちだったのを覚えている。それ以来、祖父と魚の話はあまりしなくなってしまった。

そんな時、学校の授業で日本の漁業が抱える様々な問題について学ぶ機会が

あった。その中で紹介されたのが「漁師の約束」と呼ばれる甕島（こしきじま）の取り組みだった。いつまでも魚のとれる甕島を守りたいという思いから、漁師が独自に決めたものだという。全国一の漁獲量を誇るきびなごに関して、禁漁区や保護区を設定したり、小型の魚はとらないなどの取決めを行ったりしたのだそう。その結果、少しずつ漁獲量は増え、今では大きく新鮮なきびなごが安定して供給されるようになったという。素晴らしいことだと思った。私は自分のことのようにうれしく、誇らしい気持ちになった。早速、祖父にもそのことを話した。そして私も将来、海や魚を守る仕事をしてみたいという気持ちを伝えた。祖父は、頑張りなさいと言ってくれた。私は霧が晴れたように嬉しい気持ちになった。

さらに、その思いを強く確かなものにしたのが、東北の大震災だった。船も漁場も失い、これから先も漁業を続けることができないのか今もなお不安と戦う人々がいる。澄んで豊かな表情を見せていた東北の海が、濁り変わり果てた姿をテレビで見た時、私は恐ろしくなった。目に見える部分の復興もなかなか進まない中、見えない部分の手助けがおろそかになりはしないだろうか。私は、いともたつてもいられないようなもどかしさを感じた。何か助けになることができたいだろうか。

すると母が、自分が大学生だった頃のことを話してくれた。今はウミガメの産卵地として有名な吹上浜だが、当時は卵を盗掘する人が後を絶たなかったそうだ。何とかしてウミガメの命を守りたいと思った仲間が集まり、浜辺のパトロールを続ける活動を始めたそう。ウミガメが産卵するのは夜中から朝にかけて

なので、大変な苦勞があつたそうだが、その地道な活動が行政を動かし、鹿児島県は全国で初めてのウミガメ保護条例を制定するに至つたのだ。

「あの頃助けてあげた赤ちゃんのカメが、そろそろ戻ってきてくれるかな」と母が言った。ウミガメが大人になるまでに生き残る確率は五千分の一ほどだそうだ。気が遠くなるほどの旅を経て、母ウミガメが鹿児島島の海に戻ってきてくれるとしたら、本当にすごいことだ。

甬島の取り組みも、ウミガメの保護活動も、結果がすぐに見えるわけではない。見えないことを目標に努力を重ねることは、容易なことではないはずだ。だからこそ私は、何十年か先の未来を守るために、役立つ人間になりたいと思うのだ。東北の海も、甬島の海も一つの海だから。

グループ部門

### 審査委員特別賞

広島県立加計高等学校 芸北分校



屋ヶ迫広樹さん三年  
鷺野由妃乃さん三年  
仁井山志穂さん二年  
林 和樹さん二年

母校をなくさない

地域に根ざした小規模校を

存続するために

「あなたの母校がなくなつた」と聞くと、それについてどのように思うだろう。ほとんどの人は「そうですか」と素直に受け入れることができないと思う。今、広島県では平成三十五年までに小規模高等学校の統廃合が進められている。私たちが通っている学校は、平成二十九年までに全校生徒八十名に達しない場合、廃校となることが決定している。

私たちは学校での総合的な学習の時間「みのり学習」で学校の存続について話し合い、考えた。すると、学校だけでなく芸北地域全体の課題が見つかり、それらの課題を解決するには、まず私たちが行動に移し、自分たちの学校を地域だけでなく全国に向かってアピール、宣伝することが大切だと考えた。誰かが何かしないと何も始まらない。何も変わらなない。自分たちの学校をなくしたくないという思いから、「今、芸北分校は輝いている」をテーマにみんなでさまざまな意見を出し合い考えた。

### ・芸北分校の魅力

現在、私たちが通っている広島県立加計高等学校芸北分校は、一年三十名、二年生二十二名、三年生十六名の計六十八名だ。「文理」「農業」「体育」の三コースがあり、それぞれが進路実現に向けて頑張っている学校だ。農業コースはリンゴなどを育て販売し、地域に貢献している。特に体育コースは、スキー関連の科目を中心に学び、スキー部は毎年全国大会に出場するほどの実力だ。県内唯一の分校の生徒がこんなに毎日輝いているのはどうしてだろうか、具体的にどのような魅力があるのか挙げてみた。

一つ目は、クラスの人数が少ないということだ。そのため毎日友だちと深くかわることができ、クラス替えもないため団結力が強まるということが挙げられる。例えば、体育祭や文化祭では、クラスで行事を盛り上げるのはもちろんのこと、これを楽しみにされている地域の方も参加されてグラウンドや体育館がいっぱいになるほど盛り上がるのだ。さらに、受験のシーズンになると、試験前日に受験生を前にしてクラスメイト全員が大声でエールを送る。それに加えて、学校生活や学校行事では全員がそれぞれの役割を与えられ、責任感を持つことができ、人との関わりや社会性などをしっかりと学ぶことができる。人前に出て話すことが苦手な生徒も、責任ある役割を持たされることによって、回数を重ねる度に表情が豊かになり、卒業するころには「いつでもどこでも・誰にでも・そして自分から」なんでもすることができる。このように、生徒全員が何ごとにも一生懸命に取り組み、周りの人も、うまくできないからといってその人を馬鹿にするのではなく、みんなで応援し高めあう。つまり「一生懸命がかっこいい」

ことを知っているのだ。

二つ目は、教師との距離が近いということだ。クラスの人数が少ないこともあり、授業中に何度も質問や発言をすることができ、全員が積極的に参加することができる。例えば、社会の授業では先生が生徒に対し「教科書の音読をしたい人」と聞くと、生徒全員が積極的に手をあげる。そして、先生とジャンケンをし、誰が音読をするか決めるのだ。このような授業風景は他の学校では見ることができないだろう。先生方と一緒に、皆、意欲的に取り組んでいる。

#### ・芸北地域の魅力

自然が豊かなことである。私たちが棲む芸北地域は、広島県の西北部の山間部に位置するところで、周りは山や川に囲まれた自然豊かな地域である。また、農業が盛んで、米・リンゴなどさまざまな果樹や野菜を育てているので、いつでも新鮮な野菜を食べることができる。冬には1<sup>≧</sup>以上の雪が積もり、スキーが盛んである。そのため、自然や動物に多く触れ合うことができ、道徳心や素直な心を養うことができる。

これだけの魅力があるにも関わらず、なぜ生徒が集まらないのかを私たちがなりに考えた。

#### ・芸北分校の課題

寮がないことが挙げられる。芸北分校では現在、寮がないため、遠くから来た生徒は下宿するしか方法がない。北広島町からの補助金もあるが、他人の家を間借りするという昔ながらの下宿スタイルは今の若者にとつてかなりのハードルになるため、下宿は難しい。だから生徒が集まらないのだ。

一つ目は、交通の便が悪いということ

だ。現在、芸北地域には高速道路が通っていない。広島市の街地に行くには、どう頑張っても一時間以上かかってしまう。また、バスや鉄道といった公共交通機関やタクシーがないため不便である。そして、冬場には積雪のため、さらにアクセスが困難になってしまうのだ。

二つ目は、働く場所が少ないということだ。現在芸北では、働く場所が少なく田舎で働いてもお金を稼げない。地元に残りたくても残れないのだ。そのため、若者は市内の会社に就職もしくは進学している。逆に他の地域から芸北に引越してくる人の割合が、出ていく人と比べても少なく、減少傾向にある。また子どもの数も年々減っている。

#### ・ピンチをチャンスに

これらの意見を参考にしながら、どのようにしたら芸北分校やその他の小規模校を残すことができるのか考えてみた。

一つ目は、芸北の魅力をもっと他の人たちに知ってもらうということだ。広島市内の人に「芸北を知っているか」と聞くと「知らない」と答える人が多い。だからまずは、もっと芸北の名前をアピールすることが重要だと考えた。そのためには、夏はキャンプ・山登り・果物狩りを取り入れたツアー、冬はスキー・温泉を取り入れたツアーなど観光プログラムを多く取り入れるというのはどうだろう。

また、市内の子どもたちに向けた自然ふれあい体験なども効果的だと考える。普段体験できないこと、例えば、牧場で牛の乳を搾ってみたり、サクラソウなどの珍しい草花を見たり、川遊びをしてみたりと、豊かな自然に触れ合い、芸北を好きになってもらうということだ。その



ことによりロコミで芸北の話題が広がるといった二次効果も期待できる。

二つ目は、学校の特色や情報を発信するということだ。市内の人には芸北分校もあまり知られていない。だから芸北分校の素晴らしい伝統や魅力を詳しく発信することが重要だと考えた。現在、芸北地域は豊平・千代田・大朝の三つの地域と合併し、北広島町となっている。北広島町には地元放送番組がある。その番組では、それぞれの地域であったイベントの情報などを放送している。だからこの番組に芸北についてもっと積極的に放送してもらい「どんなことをしているか」を多くの人に知ってもらおう。また、インターネットでもフェイスブックといった情報ツールを利用し、イベントの情報を発信することにより、たくさんの方に見てもらえるといった可能性も出てくるはずだ。

三つ目は、学生の住む場所を確保するということだ。芸北の欠点でも述べたことだが、遠くから来た学生は下宿をするしか方法がない。だからまずは寮を設置することが大切だと考える。これは実際に、統廃合された小学校の旧校舎を寮に建て替えて使用するといった計画が進んでいる。

次に、芸北の約三十km先にある高速道路の広島北インターまでの公共交通機関の便を増やすということだ。現在は、便数も限られ一日に数えるほどしかない。交通機関のルートを遠くまで伸ばすのは負担が大きいので、便を少しでも増やす。特に、早朝や夜遅い時間帯の便を増やすことにより、部活終わりでも帰ることができるようになるとよいと思う。

地域の人々と関わりながら、大規模校にも負けない元気と迫力で一人ひとりがいきいきと学校生活を送っている芸

北分校。全国的に名高いスキー部をはじめ、地域の伝統を受け継ぐ神楽部など活気ある部活動の数々。そんな芸北分校の歴史を絶やさぬよう、私たち若者がいつまでも守っていこうではないか。

「今、芸北分校は輝いている」という誇りをいつも胸に。